

ロマン語における -SC 型活用について

島 岡 茂

1. -isc, -esc 型活用の起原:

この形の *infixe* (挿入辞) をもつ活用形を一般に *conjugaison inchoative* (起動活用形) というが、それはラテン語では最初この形 (厳密には *-se*) がもとの動詞に *inchoatif* のニュアンスを与えたことによる。当時の文法家によれば *calesco non est caleo, sed calere incipio* 「熱くなるということは熱くあることではなく、熱くあ(な)りはじめることである」と区別されている。もう一つ例をあげれば *flōrēre* が「花が咲いている」状態を示すのに対して *flōrēscere* は「花が咲きはじめる」始動のAspectを示していた。古典的ラテン語ではこの活用形は比較的少なく、それもほとんどが自動詞に限られていた。おそらく起動が問題になるのは主として状態を表わす動詞だったためだろう。つぎに代表に *florere* と *florescere* 「花が咲く」をとってその活用形を比べてみるとつぎのようになる:

<i>flóreo</i>	<i>florésco</i>
<i>flóres</i>	<i>floréscis</i>
<i>flóret</i>	<i>floréscit</i>
<i>florémus</i>	<i>florémus*</i>
<i>florétis</i>	<i>florétis*</i>
<i>flóreunt</i>	<i>floréscunt</i>

*印はそれぞれ *florescúmos*, *florescátes* となりそうだが、俗用では形が煩わしいためと、アクセントの統一のため、もとの形をそのままとっていた。両者を比べてみると、意味は別としても、形の上では後者の方が表現性に富む上、アクセントの位置に統一があり、そのことからこの形が一般大衆の、それもとりわけ話しことばの中で愛好されることになった。

ところがこの形が普及するにつれて、本来の起動相の意味がうすれていった。さきにあげた *calesco* についての文法家の注意もこれを裏書きするものだが、さらにカエサル『ガリア戦記』にも *cum maturēscere frumenta inciperent* 「麦が熟し始めたとき」とあって、この形がすでに起動のニュアンスを失いつつあったことがうかがえる。その原因の一つは両形が共通の完了形 *florui* … をもっていたことによる。素朴な言語感覚では完了した過去の世界では起動のAspectを考えにくかったのだろう。起動のニュアンスを失うと同時に、この形は自動詞ばかりでなく、他動詞の領域にまで拡大していった。たとえば古くは他動詞 *augere* 「ふやす」に対し、*augēscere* 「ふえる」は自動詞だったのが、後期ラテン語では後者もまた他動詞「ふやす」の意味に使用されたのである。*assuēscere*, *insuēscere* なども最初は「習慣がつく」意味の自動詞だったのが、後には両者とも「習慣をつける」の意味に転用されている。

2. -isc, -esc 型活用の分布

ところでこの *-esc* 型の活用はおそらく古くは *-isc* 型から出たものと思われるが、その

流行はやがて -ire 型活用にまで拡大し、-isc 型の流行をみるに至った。現在のロマニア各地における両形の分布をみると、大体つぎのような区分がみられる。-esc 型は西ではやや形をくずしてポルトガル、スペイン地区、ベアルン地方を含むカタロニア地区、ドフィネとサヴォアを含むフランス南東部、レト・ロマン地区、南イタリアの一部（ナポリ方言）、ルーマニアを中心とするバルカン地域などがこれに含まれる。一方 -isc 型はイタリアから、南フランスをへてフランス北部に拡大している。この形がとくにこの地域で好まれたのは、ここでは ē 型活用が一段と狭まって i 型に変る傾向があったためである (florēre > florire) つぎに現代語にみられる -esc、-isc 型活用の一部を示そう：

ガスコン		ラングドック	
partechi	fine	sentie	sentissi
parteches	fines	sentes	sentisses
partech	fine	sent	sentis
partim	finem	sentem	sentissem
partits	finets	sentetz	sentissetz
partechen	finen	senton	sentisson
イタリア		プロヴァンス	フランス
FINIRE		FINIR	FINIR
finisco	finisse	finis	
finisci	finisses	finis	
finisce	finis	finit	
finiamo	finissèn	finissons	
finite	finissès	finissez	
finiscono	finisson	finissent	
スペイン		カタラン	ルーマニア
FENECER		SERVIR	A LOCUI
fenezco	serveixo	locuesc	
feneces	serveixes	locuești	
fenece	serveix	locuește	
fenecemos	servim	locuim	
fenecéis	serviu	locuiți	
fenecen	serveixen	locuesc	

まず -esc 型からみると、スペイン語では不定法がすでにこの形 (< finescere) をとっているが、これはポルトガル語とともにイベロ・ロマン語の特徴になっている。古くは『エル・シッド』にもみられる *fenir* という形もあったが、これは完全に姿を消している。これはイベリアにおける -esc 型の強さを裏書きするもので、今日両語とも *agradar* 「うれしい」に対して、*agradecer* 「感謝する」、ゲルマン系の *guarnir* に対して *quarnercer*

「装備する」の形をもっている。ただ現在ではこの活用形は一般の-er型活用に組込まれてしまっており、-escの名残りはa, oのまえ一人称単数のfenezco, 接続法現在の各人称、命令法の一部にだけ認められるにすぎない。しかもこの-zeの起原はまったく忘却されたため、他の母音に導かれる-er, -ir型動詞でも、-ecer型とのアナロジーから、同じ人称で-zeをとりlucir「輝く」→luzcoのように活用している。

カタロニアと、ピレネーをこえたガスコーニュ地方では-esc型を中心に、一部-isc型が混入してかなり複雑な様相を呈している。これはおそらく南仏のオック語からの影響によるものと思われる。たとえば同じカタラン語でもヴァレンシア方言では-ixc, -ixes, -ix, -im, -iu, -ixenの語尾をとり、明らかに-isc型から出ている。また標準カタラン語でも古くは一人称単数形にservescの形が残っていたが、他人称の-ixe(<-sce)とのアナロジーで今の形に変化した。複数一・二人称が-escをとらず古形のまま残っているのは、さきの俗ラテン語の活用そのままである。これはイタリア・ルーマニア語でも同じだが南北フランスでは-isc化している。これについては後でふれることにする。

つぎに南仏に移ると、他のあらゆる語形と同様、きわめて複雑な様相を呈している。まずカタロニアに近いガスコーニュ方言をみる。ここでは他の地域では原形のまま残っている多くの-ire型動詞が-esc化している。たとえばpartire, sortireの類である。これはとくにピレネーに近い区域で著しい：partechi, -eches, -ech, partim, partits, partechen。これはカタラン語の活用にかかなり近い。ところが同じガスコンでも北部のジロンド・アルマニャック地区では-isc化し、partichi, -iches, -ich…になって、明らかにラングドックやプロヴァンス語の影響を受けている。

南仏オック語圏ではフランス語と同じように-isc型が定着している。古い形では, finisc, finis, finit, finem, finetz, finissen(-on)の活用もみられるが、現在では、東のプロヴァンスではさきの表で示したfinisse, finisses…の形、西のラングドックではわずかに異なるfinissi, finisses, finis, finissem, finissetz, finissonの活用をとっている。この変化で注目されるのは、カタラン、ガスコン両語とちがって一・二人称複数形にまで-isc型が侵入していることで、これは北部のフランス語のばあいと一致している。これらの形が語幹にアクセントをとる若干の方言では、この現象は容易に説明できる。たとえばスイスのヴォー方言finisen, グリュイエール方言parteseなどがそれである。しかし、フランス語や南仏オック語のばあいはアクセントからは説明できない。

順序として北のフランス語に移るまえに、東のイタリア語をみることにする。ここも-isc型の圏内にあるが、南方のナポリ方言にfenesco, fenesci…のような-esc型活用もみられる。一・二人称複数形はカタラン、ガスコン語と同じく原形を保ち-isc型をとっていない。

ルーマニア語にも-esc型活用は少なくない。この型の流行が俗ラテン語の段階にあったことを傍証するものである。西のロマニアでこの型が新来のゲルマン語に流行したのと同様に、ルーマニアでもあとから入ったスラブ語の中にかかなりの数の-esc型活用がみられる：iubi「愛する」、iubesc, iubești, iubește, iubim, iubiți, iubesc。

3. フランス語における-isc型

フランス語ではこのisc型系列の動詞を第2群規則動詞とよぶが、その数はやく351に達

し、ロマニアのどの地域に比べてもはるかに傑出している。とくにゲルマン系の動詞では -isc 化が目立つが、その一例として haïr 「憎む」がある。この動詞は初めは -ir 型で, he (haz), hes, het, haons, haez, heent と活用した。ところがこれと競合して haï-s, haï-s, haï-t, haïssons, haïssiez, haïssent という -isc 型があらわれ、今日では複数人称ではこの形の方が定着している。単数形も俗語では使用されている。不定法も古い hair は -isc 型 haïr によって交代されている。

この他にも古くから -ir 型と -isc 型との相互干渉、活用の混合とためらいは随所にみられ、その多くは -isc 型が俗用から発したところから起っている。欠如動詞 bruire 「ざわめく」は原形とは無関係に bru- を語幹とみれば -isc 型活用に入る。ただし古形は bruy- が語幹で、18世紀までは半過去は bruyait だったし、現在では形容詞になっている bruyant 「うるさい」は古い分詞形だった(今は bruissant)。salire から出た欠如動詞 saillir とその合成形も活用に混乱がみられ、「突出する」意味では原形の saille, 「迸る」意味では -isc 型 saillit が使用され、後者の方がやや優勢である。合成形 tressaillir も古形が正規だが、-isc 型の変化もみられる(tressaille ~ tres-saillis)。欠如動詞 vêtir も 18 世紀以降 -isc 型がみられ il vêtit, ils vêtissent (正しくは vête, vêtent) の形が用いられることがある。emplir は古くは原形 emple と emplit とが競合していたが、今日では後者(-isc 型)に統一されている。さらに注目されるのは今日では多くのロマニ語において -ir 型をとっている partir, sortir などの動詞も古く『ローランの歌』などでは partissent の型がみられることから、かつては -is 型をとっていたことがわかる。この活用はさきに述べたガスコーニュ方言では今も行われている: partéchi, sourtéchi。この地方がとくに -isc, -esc 型を好んだことは、さらに ouvrir, offrir 型動詞にまでそれが及んでいることでもわかる: oubréchi, oubréches...

-ir 型と -isc, -esc 型との選択のためらいはフランス語だけでなく、ロマニアの多くの地域でも同じようにみられる。たとえばイタリア語で assorbire 「吸収する」は assorbò, assorbisco と両方の活用形をもつし, applaudire 「喝采する」, mentire 「嘘をつく」, nutrire 「養なう」なども双方の形をもっている。また現在では -isc 型しか認められていない tradire 「裏切る」, patire 「苦しむ」なども、古くダンテの作品では trade, pate の形がみられるのである。同じためらいがルーマニア語にもみられる。împărți 「分配する」は împart, împărțesc の両形をもつし, sorbi 「吸収する」も sorb, sorbesc 双方で活用する。また今は -esc 型に統一された prinde 「捕える」, păți 「苦しむ」なども古くは prînd, pat の形をもっていた。

4. 接続法・命令法と -sc 型

接続法にあらわれる -esc, -isc 型活用は、その現在形でほとんど直説法のばあいと同じ人称部位にみられる。

イタリア	フランス	スペイン
finisca	finisse	fenezca
finisca	finisses	fenezcas
finisca	finisse	fenezca
finiamo	finissions	fenezcamos
finiate	finissiez	fenezcáis
finiscano	finissent	fenezcan

俗ラテン語の語尾母音 -a が広く保たれている。スペイン語では直説法でもそうだったが、a, o のまえだけで -sc(zc) の形が保たれるため、接続法ではすべての人称にわたって、-zc が残されている。-esc, -isc の分布についても直説法と同じだし、イタリア・カタラン語で複数一、二人称形が古い -ir 型活用をとっているのも直説法のばあいに等しい。南仏からカタロニアにかけては、これまた直説法と同じく状況はきわめて複雑である。プロヴァンスでは finigue, finigues, finigue... だが、ラングドックでは finigui (または finisqu), finiguas, finigua... と活用する。カタロニアでは fineixi, fineixis, fineixi... が一般的だが、方言では finesca, finesques, finesca... も残っている。ガスコニュ方言では partesque, partescas, partesca... とカタロニア方言に似ているが、さらに古い partescoy, partescos, partesco... の形も残っている。

ここで一・二人称複数形をみると、ガスコニュ語では直説法ではカタラン語と同じで -ir 型 (-im, -its) をとっているが、接続法ではカタランと異なって -esc 型 (esquiam, esquiat) をとっている。ただしアラゴン地方に近いレスカン地区の古い形では partiàm, partiàts のような -ir 型活用を残している。この点ではイタリア語でも同じような現象がみられ、トスカナの方言の中には finischiamo, finischiate の形も存在しているのである。これらの事実を総合すると、-sc 型は直説法よりもさらに接続法の中により浸透しやすかったことが窺われる。これはこの叙法のもつ情意的強調に -sc 型の表現力がよりよく順応したためかもしれない。なお、ルーマニア語では単複 3 人称形 (fineasca) を除けば、接続法と直説法とはまったく同形になっている。

命令法はフランス語では一人称複数と単複二人称の 3 つだけ、いずれも直説法と同形をとる。南仏ラングドック方言では単複二人称だけ finis, finissetz となり、以上いずれも -isc 型である。同じ南仏でもプロヴァンスでは命令法は他の南欧語と同じで、一人称単数を除く 5 つの活用形を具えている: finisse, -igue, -issen, -isses, -igon、いずれも -isc 型から出ている。ガスコニュ方言では -sc 型は二人称単数形だけにみられる: seguech, seguich「あとにつづけ」。後者はアルマニャック地方の方言で -isc 型をとっている。イタリア・カタランの両語では一・二人称複数形が -ir 型をとる点で他の叙法と同じであり、スペイン・ポルトガル語でも -esc 型をとっている。ルーマニア語では単複二人称だけあって、形は直説法現在と同じ: muncești, munciți「働け」、単数形だけが -esc 型をとる。

5. 不定法・半過去・定過法・現在分詞における -sc 型

不定法にあらわれる -sc 型が少ないのはこの形がやや抽象的で、強意を要する位置で使用されることが少ないためだろう。それでもスペイン・ポルトガル語 (fenecer) や、カタラン語の一部 (créixer), 南仏ガスコンの一部 (aubrèche「開く」, abèche「もつ」)。語末の r が消えている), さらには南伊カラブリア方言 (tradiscire), シチリア方言 (tradisciri), ナポリ方言 (capéscere) の一部にもみられるが、いずれも Romania 全体からみて辺境の地といえるだろう。

これに比べて、直説法半過去に浸透した -sc 型の範囲はかなり広い。その第一は南北ガリア地区で、フランス語がこれを代表している。半過去の -isc 化はすでに俗ラテン語の段階から起っている。finisceba(m), finiscebas, finiscebat... がそのままフラン

ス語の *finissais, finissait...* につながっている。これは南仏プロヴァンスやラングドックのばあいも同じである：*finissieu, finissies, finissie...*；*finissiai, finissias, finissia...*。ガスコーニュでもアルマニャックやバイヨン地区では *partichebi, oubrichewi* のように半過去に *-isc* 型がみられるが、ピレネーをこえたカタロニアでは古い *-ir* 型が残っている：*servia, servies, servia...* 同じ *-ir* 型変化がイタリア語にも残っている：*finivo, finivi, finiva...* 但し方言の一部（ラツィオ・スピャコ地区）に *capiscéa* 「わかっていた」のような *-isc* 型活用もないではない。スペイン・ポルトガル語では *-ecer* がそのまま半過去を構成するから、*-esc* 型半過去とみることができる：*fenecía, fenecías, fenecía...* (<*finescebam...*)、ルーマニア語ではこの時称には *-esc* 型は使用されない：*locuiam, locuiai, locuia..* 「住んでいた」（現在形 *locuiesc...*）

ラテン語では完了過去（定過去）で *-ir* 型と *-sc* 型とが同形だったため、この時称で *-sc* 型をとる言語はきわめて少ない。とくに *-isc* 型が好まれたガスコーニュのバイヨン・アルマニャック地方に *partichouÿ, oubrichouÿ, droumiscouÿ* 「出かけた、開いた、眠った」などの形がみられ、イタリアのカラブリア方言でも *guariscivi* 「直った」などの形が残されている。この地方ではさらに不定法を通して未来形・条件法にまで *-isc* 型が滲透し、*patisciarria* 「苦しむだろう」などと言われる。

ラテン語で定過去に *-sc* 型が浸透できなかった理由としては、すでに俗ラテン語の段階でアクセントの位置が一定していたこと（*finii, finisti, finiet, finimos, finistes, finiront*）、さらに現在形ほど大きな表現力を必要としなかったことなどによるものと思われる。

現在分詞に *-isc* 型が入った例は南北フランスにみられる。フランス語 *finissant*、プロヴァンス語 *finissènt*、ラングドック語では *-ir* 型と共存し *finint, finissent* (*finiguent*) の両形がみられる。スペイン・ポルトガル語の *-ecer* からつくられる *feneciendo* もこの系列とみることができよう。一方カタラン語はラングドックの古形と同じ *-esc* 型はみられない。イタリア語 *finente*、ルーマニア語 *iubind* 「愛しつつ」などすべて古形になっている。

過去分詞は南北フランスとも古形 *-ir* 型により（*fini, finido, finit, finida*）、*-sc* 型をとるのはカラブリア・ラツィオ方言 *capiscitu, spartiscitu* など辺境の地だけである。

結 論

-sc 型のまったくみられないのはサルディニヤ、ダルマチアのヴェリヤ方言、中部イタリアのアブルツィ方言など、古い時代にローマの文化の流れから隔絶された地方に限られている。その後ローマ人が進出したすべての植民地にこの形が残っているのは、おそらく俗ラテン語とともに、最初に *-esc* 型が、つづいて *-isc* 型が広められたものと思われる。その音声的な表現力のつよさと、アクセントの一定化とが、その後のこの形の流行を助けたものと考えられる。